

## 生活保護改悪 反撃へシンポ

静岡県社保協

静岡県社会保障推進協議会は8日、「どうなる・どうする 生活保護の危機」と題した県民シンポジウムを静岡市葵区で開き、会場いっぱいの85人が参加しました。

参加者は、安形義弘・全国生活と健康を守る会連合会会長の講演と、パネリストの県生健会袋井市副支部長の須川益雄氏、県民医連・米山町クリニック事務長の西山理恵氏、自治労連社会福祉部事務局長の二見清一氏の話に聞き入りました。

安形氏は、衆院を通過した生活保護制度改悪案は、口頭申請を認めない「水際作戦」を合法化するものと説明。現在でも、資格のある人のうち利用している人は18%ほどなのに、さらに受けづらくなり生死が脅かされる

と指摘し、「生活保護の改悪は年金や最低賃金など国民全体の切り下げに関わる問題。改悪を許さないために反撃の大きな連帯を広げましょう」と呼びかけました。

須川氏は、生活保護を受けるまでには自殺を決意したこともあったと発言。西山氏は、路上生活者の支援をするもとで緊急の食料支援などしない沼津市の対応を交渉で改善させたと紹介。二見氏は、行政職員の立場から、行政と申請者が対立させられている問題を述べ、生活保護改悪に向かう政治に国民全体でNO運動を起こそうと語りました。

会場からの発言で、生活保護を受けている男性が「最低限の生活を送っている。改悪で保護費が削減されればお米1袋分。生きていけなくなってしまう。改悪断固反対に協力してほしい」と訴えました。